

平成 22 年 6 月 26 日現在

機関番号 : 26401

研究種目 : 基盤研究 (C)

研究期間 : 平成 18 年度 ~平成 21 年度

課題番号 : 18592389

研究課題名 (和文) 乳児期の子どもを育てる親を育児困難感から解放するコミュニケーション技術の開発

研究課題名 (英文) The development of the communication technique it is hard to take care of its baby, and to free a parent bringing up an infant child from a feeling

研究代表者

嶋岡 暢希 (SHIMAOKA NOBUKI)

高知女子大学看護学部・講師

研究者番号 : 90305813

研究成果の概要 (和文) :

本研究では、言語的コミュニケーション手段をまだもたない乳児期の子どもと、その子どもを育てる両親が、お互いの意思疎通を図り、育児困難感を軽減できるコミュニケーション技術を開発することを目的とし、乳児期の子どもをもつ両親にインタビューによる調査を行った。

その結果、以下のようなことが明らかになった。1~4 ヶ月の子どもをもつ両親は、「子どもの泣き」など、子どものニーズに対応できず、子どもの行動に変化がみられない状況で困難感を感じているが、その困難な状況でも子どもの変化を期待せず、「状況を分析する」、「他者に委ねる」、「ありのままを受け入れる」などの方法をもつことで重大な困難感に陥らず対処できていることが明らかになった。

また7~11 ヶ月の子どもをもつ両親は、発達に伴い行動範囲が広がり、親の意思とは違う行動をする子どもに対し、一方的に子どもをコントロールしようと試み、子どもの行動が変化しない、あるいは親の期待と逆の状況になる場合に困難感を感じていた。その状況において、理想とする親像にとらわれたり、時間の余裕がなく親の思いを優先させようとするコミュニケーションを行っている場合には、親自身が「子どもへの困難感」をいだけでなく、「自分自身への失望」や「無力感」をい結果になっていた。一方、子どもとの相互作用そのものを楽しみ、親の思い通りには行動しない子どものありのままを受け入れ、その状況を客観的に分析し、子どもの気持ちに近づこうとするコミュニケーションを行っている場合には、親は「悩んでも仕方ない」「うまくいかないことがあって当然」と割り切り、「子どもの変化や成長を喜ぶ」といった視点で子どもからエンパワーされ、「今の自分で OK」という思いや「親として成長した自分」を感じ、エンパワーされていた。

これらの結果をもとに、今後ガイドラインを作成する予定である。

研究成果の概要 (英文) :

In this study, the parents who brought up the infant child who did not yet have verbal communication means and the child planned each other's mutual understanding and were intended that I developed the communication technique that the parent was hard to take care of baby, and could reduce a feeling and performed the investigation by the interview to the parents who had an infant child.

As a result, the following things became clear. The parents who had the child of 1-4 months felt a feeling of difficulty in the situation that a change was not seen in for the action of the child not to be able to cope with the need of the child including "the crying of the child", but it became clear that I could deal without even the difficult situation expecting the change of the child without falling into a feeling of serious difficulty by having a method to "accept straight fact" to "entrust to others" to "analyze the situation" into.

In addition, the parents who had the child of 7-11 months felt a feeling of difficulty when field of activities spread out with the development, and a trial, the action of the

child did not change to control a child for the child who acted different from the intention of the parent one-sidedly or I was in situation that the parent was reverse to the expectation of the parent. When the parent was seized with an ideal and a pro-image to do in the situation and there was not a time to spare and performed the communication that the parent was going to give priority to the thought of the parent over, it followed that "disappointment to oneself" and "a feeling of ineffectualness" not only parent oneself held "a feeling of difficulty to a child". On the other hand, enjoy interaction itself with the child, and analyze acceptance, the situation in the straight fact of the child who does not act just as wanted of the parent objectively, and is going to approach the feeling of the child; when communicate, as for the parent, there "is no help for it even if is troubled"; "might not succeed, and naturally" was practical, and was empowered in a viewpoint to "be pleased with a change and the growth of the child" by a child, and felt thought called "OK and "oneself who grew up as a parent" by oneself present", and was empowered.

Based on these results, I am going to make guidelines in future.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
18年度	1,500,000	0	1,500,000
20年度	800,000	240,000	1,040,000
21年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	570,000	3,970,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：親子関係、コミュニケーション、乳児、母性看護

1. 研究開始当初の背景

2005年の日本子ども家庭総合研究所の調査では、子育てをしている母親の約30%が育児ストレスを頻繁に感じていると答えている。また子育てをつらいと感じることのある両親は約40%に達し、その理由として、「子どもとどのように接すればよいかわからない」と答えた両親が全体の15%に上る（内閣府大臣官房政府広報室、2003）。出産にかかわる臨床では、親子の愛着形成のため、出生直後のカンガルーケアの導入、出産後の母子同室などを積極的に取り入れる施設が増えたものの、出産後の育児指導は、そのほとんどが、一般的な沐浴方法や環境調節の仕方、母乳やミルクの与え方を占めているのが現状である。両親は、子どもが生まれてくることを期待しながら、実際には、子育てがつらいと感じ、子どもとのコミュニケーションを図る手段が見つからず、「泣き止まない」と虐待に走るケースもある。

このような現状を踏まえ、乳児期の子ども

と両親とのコミュニケーション技術をガイドライン化し、提供することは、子どもと両親の愛着形成をより強固なものにするに留まらず、育児中に感じるつらさや困難感を軽減し、子どもと親との意思疎通を図り、より良い関係を早期から築くことに寄与すると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、言語的コミュニケーション手段をまだもたない乳児期の子どもと、その子どもを育てる両親が、お互いの意思疎通を図り、育児困難感を軽減できるコミュニケーション技術を開発することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 乳児期の子どもをもつ両親を対象に、インタビューを行い、以下の視点で分析する。

① 乳児期の子どもをもつ両親はどのような状況を育児困難と判断し対処したのかを明らかにする。

②乳児期の子どもをもつ両親は、育児困難に対処し解決するために、子どもとどのようなコミュニケーションを行っていたかを明らかにする。

③乳児期の子どもをもつ両親が、エンパワーされるコミュニケーションについて明らかにする。

(2)(1)の結果に基づき、乳児期の子どもと両親とのコミュニケーションガイドライン案を作成する。

4. 研究成果

1～4ヶ月の子どもをもつ両親は、「子どもの泣き」など、子どものニーズに対応できず、子どもの行動に変化がみられない状況で困難感を感じているが、その困難な状況でも子どもの変化を期待せず、「状況を分析する」、「他者に委ねる」、「ありのままを受け入れる」などの方法をもつことで重大な困難感に陥らず対処できていることが明らかになった。

また7～11ヶ月の子どもをもつ両親は、発達に伴い行動範囲が広がり、親の意思とは違う行動をする子どもに対し、一方的に子どもをコントロールしようと試み、子どもの行動が変化しない、あるいは親の期待と逆の状況になる場合を育児困難と判断していた。その状況において、理想とする親像にとらわれたり、時間の余裕がなく親の思いを優先させようとするコミュニケーションを行っている場合には、親自身が「子どもへの困難感」をいだけだけでなく、「自分自身への失望」や「無力感」をいだけ結果になっていた。

一方、子どもとの相互作用そのものを楽しみ、親の思い通りには行動しない子どものありのままを受け入れ、その状況を客観的に分析し、子どもの気持ちに近づこうとするコミュニケーションを行っている場合には、親は「悩んでも仕方ない」「うまくいかないことがあって当然」と割り切り、「子どもの変化や成長を喜ぶ」といった視点で子どもからエンパワーされ、「今の自分でOK」という思いや「親として成長した自分」を感じ、エンパワーされていた。また、エンパワーされるコミュニケーションには、「うまくいかない状況を分析してみる」ことで親自身に生じた感情に気づき、冷静になって「子どもの気持ちになって考える」ことができ、「子どもの肯定的な側面をみつめてみる」といった特徴があった。

これらの結果に基づき、今後ガイドラインを作成する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

嶋岡 暢希 (SHIMAOKA NOBUKI)

高知女子大学看護学部・講師

研究者番号: 90305813

(2) 研究分担者

中野 綾美 (NAKANO AYAMI)

高知女子大学看護学部・教授

研究者番号: 90172361

長戸 和子 (NAGATO KAZUKO)

高知女子大学看護学部・教授

研究者番号: 30210107

佐東 美緒 (SATO MIO)

高知女子大学健康生活学研究科・研究員

研究者番号: 20364135